KWASSUI
Chapelmate
KWASSUI WOMEN'S UNIVERSITY
2026　秋季号　No.186
活水女子大学宗教委員会

―朝の礼拝から―

「雨の日」が育む心の根っこ

イザヤ書 55 章 10 節

雨の日の朝は、空が暗く、足元も濡れ、いつもより少し憂鬱な気持ちになる人もいるかもしれません。私たちは、明るく暖かな晴れの日を好み、雨の日をできれば避けたいと思ってしまいます。

しかし、聖書の言葉は、そんな雨について大切なことを教えてくれます。天から降る雨は、ただ地面を濡らして終わるものではありません。土にしみ込み、植物の根を潤し、やがて芽を出し、豊かな実りをもたらします。目には見えなくても、雨には大切な役割があるのです。これは、私たちの人生にも同じことが言えるのではないでしょうか。

私たちの毎日も、いつも晴れているわけではありません。勉強を頑張ったのに思うような結果が出なかったり、友達との関係で悩んだり、自分の将来が見えなくなったりすることがあります。そんなとき、「自分の努力や苦しみは無駄なのではないか」と思ってしまうこともあるでしょう。

けれども、雨が大地を潤すように、悩んだ時間や流した涙も、決して無駄ではありません。すぐには成果が見えなくても、その経験は私たちの心の根を深く育てています。苦しみを経験したからこそ、人の痛みが分かる優しさや、困難を乗り越える強さが生まれることもあります。

雨が降るからこそ、木々は茂り、花が咲きます。今日もし雨のように感じる出来事があったとしても、それは成長するための大切な時間なのかもしれません。

周りの人と比べる必要はありません。それぞれのペースで、一歩ずつ歩んでいきましょう。

冨永　祐子（国際文化学科）

―学生スピーチチャペルアワーから―

命の泉

箴言 4 章 23 節

皆さんはかつて好きだったものへの熱意が失われたり、できていたことができなくなったりした経験はないでしょうか。私はかつて大好きだったアイドルから神様へと心の対象が移り、現在までキリスト者として過ごしてきました。

しかし昨年、観光大使としての多忙な活動から礼拝を欠席しがちになりました。さらに周りからの見られ方を気にして信仰が揺らぎ、自分を見失ってしまったのです。その影響は大きく、看護実習では以前できていた病室環境への配慮ができなくなり、自分の好きなものすら分からなくなりました。この挫折を通して、旧約聖書の箴言 4 章 23 節「何を守るよりも、自分の心を守れ。そこに命の源がある」という言葉の通り、心の拠り所を守り抜くことが自分自身を守り、心の健康につながるのだと痛感しました。

心の支えがなければ、心に穴が開いたような状態が続いてしまいます。私がキリスト教系の活水を選んだこと、そして皆さんがここに集っているのも、神様に選ばれた導きによるものではないでしょうか。長崎で 140 年以上の歴史を重ね、100 周年を迎えるチャペルで祈ることができるこの活水で、ぜひ神様の愛を受け入れてみてください。

今私はまさに神様の慈愛を感じています。何度神様から離れることがあっても、いつでも私たちを愛してくださっています。その終わりのない湧きあふれる愛こそが活ける水であり、卒業後も地域、そして世界を潤していくことが活水生としての誇りであると思います。

普段は少し遠くに感じがちな聖書ですが、弟子たちの人間味あふれる行動など、面白い場面がたくさんあります。在学中に自分自身の生涯の支えとなるような「好きな聖書の言葉」を一つでも見つけ、それが皆さんの心を支える源となることを願っています。

松葉瀬　亜紀（看護学科　3 年）